

1. 市の概要

人口・学校数

- 【人 口】 74,025人（平成30年11月1日現在）
- 【学校数】 小学校 20校, 中学校 8校
- 【小中一貫教育を実施している中学校区数】 8校



概要

大田原市は、栃木県の北東部に位置し、松尾芭蕉「奥の細道」と那須与一の郷として知られており、市の中央を流れる那珂川や八溝山系の里山など自然豊かな地域です。現在、大規模校は、小学校1校、中学校1校ですが、適正規模校が少なく、ほとんどの学校が小規模校です。1小1中が1校区、2小1中が4校区、3小1中が1校区、4小1中が2校区となっています。

2. 小中一貫教育のねらい

本市は、学校規模や中学校区の構成等が多様であるため、各中学校区で児童生徒の実態や地域の実情に即した小中一貫教育を展開していくことを重要視しています。そのため、小中一貫教育とコミュニティ・スクール（以下CS）を一体化（中学校区ごとに学校運営協議会を設置）して推進し、子どもたちの人間性・学力・コミュニケーション力・社会適応力の育成と向上を図ることをねらいとしています。その中で、特に系統性ある9年間（運営の区切りは4－3－2）で義務教育を充実させることで、一人一人の学力を最大限伸ばし、進路実現を図ることを短期目標としています。

3. 小中一貫教育導入の背景・経緯

平成20年度より「小中一貫（連携）研究事業」を開始し、毎年度1中学校区を指定して研究を進めてきました。様々な面で一定の成果は見られましたが、児童生徒の学習意欲や『自己重要感』、学校不適応等については課題が見られました。平成27年度からは文部科学省による小中一貫教育の制度化に伴い、大学教授等の有識者を含めた委員会を設置し、本市にとって望ましい小中一貫教育について検討しました。その中で、これまでの課題の整理とこれからの社会で必要な力等を検討し、市の方針の明確化を図りました。（平成30年度までに計12回の検討委員会開催）平成28年度には、若草中学校区と金田北中学校区の2中学校区をモデル地区に指定し、先行して準備を進め、平成29年度にモデル地区の取組について公開発表を実施しました。これらを経て、平成30年度より、全小・中学校で小中一貫教育とCSをスタートしました。

4. 具体的な取組内容

（1）小中一貫教育の導入と推進に向けた体制づくり

- 【平成27年】・市小中一貫教育検討委員会設置
 - ・市小中一貫教育基本方針決定
- 【平成28年】・市小中学校管理規則改正
 - ・平成29年度版「市小中一貫教育推進計画」策定
- 【平成29年】・平成29年度「各中学校区総合調整を担う校長」任命
 - ・市学校運営協議会設置規則制定
 - ・平成30年度版「市小中一貫教育推進計画」策定
 - ・平成30年度版「市小中一貫教育 CSのグランドデザイン」策定
- 【平成30年】・平成30年度「各中学校区小中一貫教育総合調整を担う校長」任命
 - ・市内小・中学校全教職員（管理職を除く）に兼務発令
 - ・市内全教職員に小中一貫教育ガイドラインの配布
 - ・市内全小・中学校で小中一貫教育コーディネーターの選出
 - ・各中学校区で小中一貫教育の推進計画とグランドデザイン策定し、各中学校区の学校運営協議会で中学校区の方針説明を実施



(2) **市のねらいを達成するための各中学校区共通の4つの具体策の設定**

- ① 9年間の教育目標を明確化し、系統性を図ったカリキュラムを作成する。
- ② 小・中学校の教職員が連携して、授業力の向上を図る。
- ③ 小・中学校で連携して、児童生徒の交流活動等を行う。
- ④ 配慮を要する児童生徒の情報共有を行い、子どもたち一人一人に適した教育環境を整える。

(3) **モデル地区・研究中学校区指定と公開発表**

【平成29年】・若草中学校区・金田北中学校区（北翔学園）

【平成30年】・金田南中学校区（金田南学園）・野崎中学校区（ののさき学園）

・湯津上中学校区（雄飛が丘学園）

【平成31年】・大田原中学校区・親園中学校区・黒羽中学校区

各中学校区で、小・中学校の教職員が協働して児童生徒の実態（各種テスト分析等）や地域の実情に合わせた小中一貫教育の重点項目を決定し、その取組等について公開発表を行います。公開発表には、各中学校区学校運営協議会委員・保護者・地域住民・市内教職員・教育委員・市議会議員等に参観してもらい、小中一貫教育の充実と理解に努めています。

(4) **市小中一貫教育の重点としての英語教育の充実とICTの効果的活用**

① 英語教育

- ・教育課程特例校を申請し、小学校1・2年から授業を実施することで9年間の系統的・継続的な英語教育を展開しています。
- ・英語活動指導員14名とALT8名を配置し、授業の充実に努めています。
- ・中学校3年間で、一人一回英検3級受検料の助成をしています。

② ICT環境の全校整備

- ・タブレットPCや教育用ICT環境を市内全小・中学校で整備しています。

(5) **小中一貫教育研修や児童生徒の交流活動推進**

① 視察研修及び市内教職員研修

- ・平成27年度より平成30年度までに、小中一貫教育の先進地区への視察研修を実施しました。（埼玉県入間市・東京都武蔵村山市・三鷹市・品川区等）
- ・小中一貫教育をCSを一体化して推進する研修会（講師：文科省 貝ノ瀬滋 視学委員，青森中央学院大 高橋興 教授）や授業力向上につながる研修（講師：東京学芸大 細川太輔 准教授等）を継続して実施し、小中一貫教育の充実と授業力向上を図っています。

② 児童生徒の交流活動推進

児童生徒が交流授業をしたり、小中合同行事等を実施したりする際の移動手段として、スクールバスが活用できるような市の予算を確保しています。（市内全小・中学校で年間3～5回）

(6) **CSと一体化した小中一貫教育の推進**

今年度より全ての中学校区で学校運営協議会を設置しました。各中学校区の第1回の協議会では、中学校区における小中一貫教育の方針について承認をいただきました。保護者・地域住民の方々にも、中学校区で児童生徒を育てていける意識をもっていただけるような地域づくりを目指しています。



大田原市小中一貫教育とCSのグランドデザイン

5. これまでの成果と課題、今後の取組

成果・「わかる授業」づくりを推進することで児童生徒の学習意欲の向上が見られました。

- ・小・中学校の教職員が共通理解のもと、さまざまな活動を進めるようになりました。

【モデル地区5校の教職員105名に対する意識調査における肯定的回答の割合の変容結果】

- 「9年間を通して児童生徒の『自己重要感』を高めているか」 H28(46%)→ H29(82%)
- 「これからの社会に必要な学力を向上させる取組がされているか」 H28(69%)→ H29(90%)
- 「個への連続した支援ができる情報伝達・情報共有がされているか」 H28(55%)→ H29(84%)

課題・保護者・地域の小中一貫教育に関する内容理解（特に、保護者ではない地域住民）

- ・CSに関する管理職や地域連携教員以外の教職員の理解

1. 中学校区概要

□教育目標 豊かに学び 未来を拓き 社会に貢献する子ども

□所在地 市野沢小学校 大田原市市野沢 2 0 7 7
羽田小学校 大田原市羽田 6 4 4
金田北中学校 大田原市市野沢 2 0 6 7



□児童生徒数

市野沢小学校 羽田小学校 金田北中学校

学 年	小学校（市野沢小と羽田小の合計）							中学校					小中 合計
	1	2	3	4	5	6	概 計	1	2	3	概 計	計	
児童生徒数	62	64	58	76	65	49	8 382	63	57	58	13 191	573	
学級数	3	2	5		5	2	17	2	2	2	2 8	25	

2. これまでのあゆみ

- ・平成 2 7 年度 小中一貫教育モデル地区の指定（大田原市教育委員会）
- ・平成 2 8 年度 北翔学園小中一貫教育グランドデザイン及び推進計画の作成
北翔学園プロジェクト会議開催
地域説明会開催（大田原市教育委員会）
- ・平成 2 9 年度 「北翔学園」開校
大田原市小中一貫教育モデル地区「北翔学園」公開研究発表会

3. 小中一貫教育の取組概要

ねらい

□中学校区の目指す子ども像：「豊かに学び 未来を拓き 社会に貢献する子ども」

形態・施設

- 形態 併設型小・中学校
- 施設 施設分離型

教職員体制

- 校長：各校に配置
- 教職員：全教職員（管理職を除く）に兼務発令
- 小中一貫教育コーディネーター：各校に 1 名配置

教育課程特例・区切り・区切りを意識させる行事

- 教育課程特例：小学校第 1 学年からの外国語（英語）活動
- 区切り：4－3－2
- 区切りを意識させる行事：実施なし

教科担任制・教員の相互乗り入れ

- 教科担任制：一部教科担任制（国語・社会・理科・音楽・外国語活動等）
- 教員の相互乗り入れ：中学校教員が小学校の授業に乗り入れ（外国語活動・体育）

児童生徒の異学年交流

- ・特別支援学級の小中合同授業
- ・小学校第 6 学年、中学校第 1 学年の合同体育授業



平成30年度版 北翔学園グランドデザイン

4. 取組の工夫：小中一貫教育推進の基盤づくり【3校全教員の話合いによる協働体制づくりの工夫】

北翔学園の3校は、これまでも互いに小中・小小連携により、児童生徒の情報共有や交流、教員の交流を行い、教育活動の推進に努めてきました。平成27年度のモデル地区指定後、これまで培ってきた絆と取組を活かしながら、さらに発展させて、9年間の系統立った教育システムを構築し、北翔学園職員としての相互理解と協働によって、小中一貫連続した指導・支援を実践しています。確かな学力の向上と豊かな人間性の醸成、さらには、社会に主体的に貢献できる児童生徒の育成を図っています。

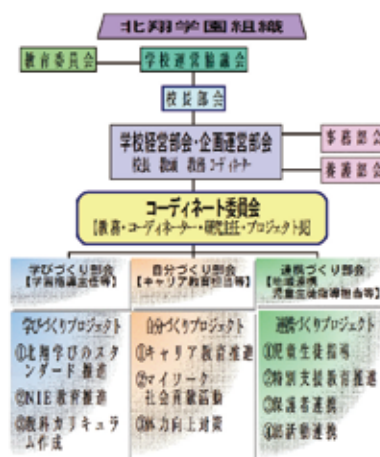
(1) 目標実現に向けた組織づくり、部会の設置

児童生徒の実態把握、分析を基に、児童生徒に身に付けたい力を「学ぶ力」、「やり抜く力」、「つながる力」とし、それぞれの力を伸ばすための計画の作成及び実践は、3校全職員が所属する「学びづくり部会」、「自分づくり部会」、「連携づくり部会」の3部会により行われ、目標実現を目指しています。

(2) 定期的な部会の開催



定期的に全教員が参加する会議は、各プロジェクトの実践についての共通理解の場となりました。また、3校の教職員の意思疎通を図り、小学校と中学校の違いを理解しながら、忌憚なく意見を交換し合える関係を作っています。特別支援学級の小中連携も図られ、合同行事等で教師、児童生徒間の交流、情報交換が行われています。



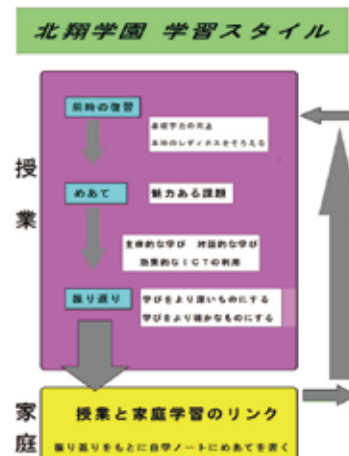
北翔学園研究テーマ
「夢と志を持ち、豊かな人間性を育み学び続ける児童生徒の育成」
～確かな学習サイクルの定着とキャリア教育の推進を核として～

(3) 確かな学習サイクルの定着

北翔学園の学習スタイルについての研究として、3校合同の授業研究会を行っています。各校の研究授業の指導案検討の段階から、3校教員で話し合い、さらに研究授業参観後の授業研究会で、意見交換を行い、よりよい指導方法への改善、指導観の共有を図っています。児童生徒は、授業の振り返り、家庭での復習の習慣化が図られました。

(4) 系統的なキャリア教育の推進

児童生徒が、将来の夢に向かって、日々の学校生活や家庭地域での生活を、今、何をすべきかという視点で捉え、実践していくことができれば、目標を意識した意欲的な生活に結び付いていくと考えています。そこで、9年間の系統的なキャリア教育の推進を行い、将来の進路実現に向けて必要な力や学習意欲の向上を図っています。



5. これまでの成果と課題、今後の取組

○教員間の連携強化

小・中学校の教員が地域の児童生徒の様子について協議することで、実態や重点指導事項などが明確になり、相互に共通理解を深めることができています。3校の教職員が、直接顔を合わせ、話し合う機会を定期的に設定したことで、北翔学園の目指す、「夢と志を持ち、豊かな人間性を育み学び続ける児童生徒の育成」を実現させるための教員集団であるという協働意識が高まっています。

○教科部会の開催、学力向上に向けた話し合い

話し合いを重ね、各プロジェクトの計画が整備され、平成29年度当初からスムーズに小中一貫教育をスタートさせることができました。今後は、定期的な会議を教科部会中心に計画し、更なる学力向上につなげていけるようにしていきたいと考えています。

1. 中学校区概要

□教育目標 よく考える子 心豊かな子 たくましい子

□所在地 薄葉小学校 大田原市薄葉2014
石上小学校 大田原市上石上1528
野崎中学校 大田原市薄葉2250



□児童生徒数

薄葉小学校 石上小学校 野崎中学校

	小学校（薄葉小と石上小の合計）								中学校					小中 合計
学 年	1	2	3	4	5	6	概 計	計	1	2	3	概 計	計	
児童生徒数	56	43	66	40	56	50	10	321	51	56	43	5	155	476
学級数	3	2	3	2	3	2	2	17	2	2	2	1	7	24

2. これまでのあゆみ

平成28年度 三校連小中連絡推進会議開催 グランドデザイン策定 小小連携外国語活動実施
平成29年度 ののさき学園授業研究会開催(3回) 3校参観授業実施 小小連携宿泊学習実施
平成30年度 小中連携アンケート実施 ののさき学園公開研究発表

3. 小中一貫教育の取組概要

ねらい 系統的な「キャリア教育」の実施！夢のある進路の実現

～9年間を見通した効果的な指導や系統的なカリキュラムの編成により「学力の向上」を図る～

□中学校区の目指す子ども像

よく考える子
心豊かな子
たくましい子

形態・施設

□形態 併設型小・中学校

□施設 施設分離型

教職員体制

□校長：各校に1名配置

□教職員

：管理職を除く全教職員に兼務発令

□小中一貫教育コーディネーター

：指名あり（各校に1名配置）

教育課程特例・区切り・区切りを意識させる行事

□教育課程特例：小学校第1学年からの外国語（英語）活動

□区切り：4－3－2

□区切りを意識させる行事：実施なし

教科担任制・教員の相互乗り入れ

□教科担任制：一部教科担任制（第5学年から国、社、算、理、体、音）

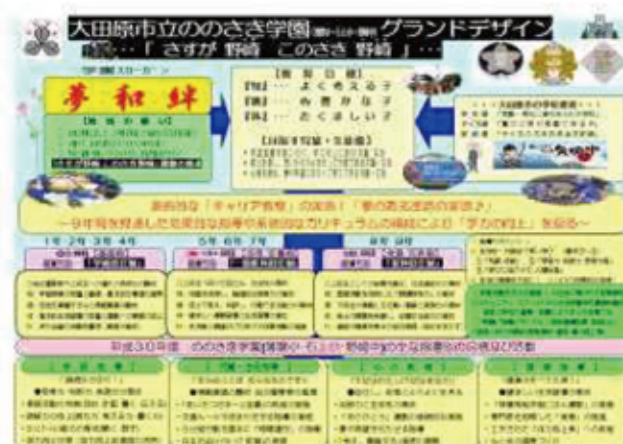
□教員の相互乗り入れ：中学校の教員が小学校の体育、外国語活動に乗り入れ

児童生徒の異学年交流

□中学校のキャリア教育発表会への小学生の参加

□地域学校保健・給食委員会への児童生徒の参加

□小・中合同のサケの放流、交通安全教室の実施



ののさき学園グランドデザイン

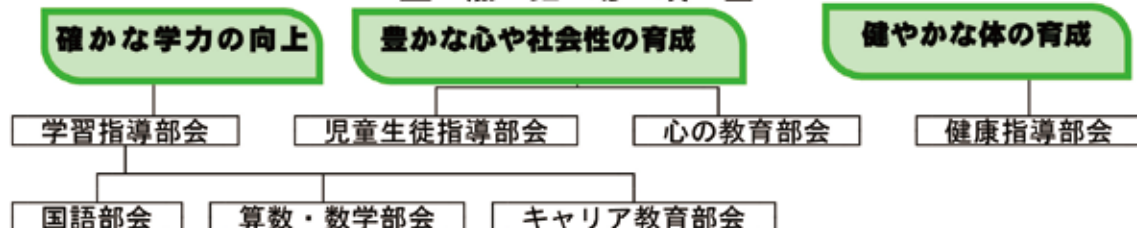


ののさき学園マーク

4. 取組の工夫：【9年間を見通した効果的な指導や系統的なカリキュラム編成の工夫】

小・中学校の教員が目指す児童生徒像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、発達の段階や教科の特性に応じた内容の系統性に考慮しながら、ねらいに沿った支援に取り組んでいます。そうすることで「夢」を叶え、社会に主体的に貢献できる力の育成を図っています。

重点指導項目



小中一貫教育の取組

野崎中学校区では、「ののさき学園」としての教育目標を設定し、グランドデザインに基づき小中一貫教育を推進しています。9年間を見通した系統性のあるカリキュラムの編成や指導方法を工夫し、学力の向上を図っています。



ののさき学園授業研究会

3校の教員が系統的で効果的な指導法について検討しています。



ののさきタイム

新聞ワークシートの活用

国語部会の取組

- 主体的に学ぶ意欲を高める言語活動の設定
低学年の例：解説書づくり クイズづくり 紹介文を書く
- 文章の内容や構造全体を捉えて読むための単元構成の工夫
説明文読み取りのステップ例
 - 1 「数える」ことでおおよその内容を捉える
 - 2 「選ぶ」課程で焦点化し詳細に読む
 - 3 筆者の意図や主張を読み解く



問いと答えを捉える

算数部会の取組

- 数量関係の内容における系統性を明らかにする
- 数学的活動を重視する
- 共通の指導事項について共通理解を図る
基本的な学習の流れ
問題提示→めあて→見通し→問題解決→まとめ・振り返り



いろいろな解き方で考える

キャリア教育部会の取組

- 「プロフィールカード」や「すごいカード」の作成
- 「マイワーク」の取組
家庭で自分の役割を果たし『自己重要感』を高める
- 「ドリームコラージュ」の作成
夢へのイメージを広げ視覚化する



プロフィールカード
自分のよさや特徴に気がきます。

5. これまでの成果と課題、今後の取組

成果として、グランドデザインを作成することで、9年間の教育目標を明確化し、具体的な取組を3校で実践化することができました。また、課題解決に向けた話し合いから、系統性のある指導を心がけるようになりました。一部教科担任制では、学習の系統性等を考慮して、わかる楽しい授業を展開しています。

課題として、9年間を見通した指導では、様々な教科や領域で系統性のある指導法を検討していく必要があります。また、3校の教職員が一同に話し合えるよう、年度当初から会議を位置付け、協議内容もあらかじめ設定しておくようにしたいと思います。学力向上に向けて、様々な取組の質的向上を図り、小・中が連携して行う交流活動を充実した内容にしていきたいと思っています。

1. 中学校区概要

□小中一貫教育目標 目指す子ども像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す

□所在地 大田原小学校 大田原市城山1-4-36
若草中学校 大田原市若草2-1234



□児童生徒数

大田原小学校 若草中学校

	小学校（大田原小の合計）								中学校					小中 合計
学 年	1	2	3	4	5	6	数	計	1	2	3	数	計	
児童生徒数	115	95	99	92	93	83	25	602	85	81	85	8	259	861
学級数	4	3	3	3	3	3	4	23	3	3	3	2	11	34

2. これまでのあゆみ

- ・平成27年度 11月から先行研究開始 中学校教員による乗り入れ授業（算数）、体育、音楽
- ・平成28年度 大田原市より小中一貫教育モデル地区指定
- ・平成29年度 大田原市小中一貫教育モデル校として開校 7月実践研究発表会実施

3. 小中一貫教育の取組概要

ねらい

□中学校区の目指す子ども像 学びを高め、よりよい社会を創造できる大田原っ子

形態・施設

□形態 併設型小・中学校

□施設 施設分離型

教職員体制

□校長 各校に配置

□教職員 全教職員（管理職除く）に兼務発令

□小中一貫教育コーディネーター 各校1名 配置

教育課程特例・区切り・区切りを意識させる行事

□教育課程特例 小学校第1学年からの英語教育

□区切り 4-3-2

□区切りを意識させる行事 特になし

教科担任制・教員の相互乗り入れ

□教科担任制 第5・6学年全教科

□教員の相互乗り入れ

- ・中学校教員が第6学年算数に週3時間、合同体育に週1時間、第1～6学年の外国語活動及び英語の授業にそれぞれ週3時間
- ・運動会・文化祭への相互支援

児童生徒の異学年交流

□第5・7学年2泊3日の合同宿泊学習 中日は市内ALT全員を招いてのEnglish day

□第6・8学年2泊3日の合同宿泊学習 中日は市内ALT全員を招いてのEnglish day

（English dayは、異学年合同で班を組み、英語を生かしたミッションを乗り越える活動）

□夏期小中合同学習会 7日間68講座（内小学生が参加可能なものは36講座）

（小学生も少し背伸びをして中学校の学習に挑戦、英検受験対策講座が充実）

□第7学年生徒による第5・6学年児童・保護者のための「中学校の生活説明会」

（班別にテーマを決めて、6か月を過ごした経験や思いをICTを駆使して小学生に説明）



English dayの活動

4. 取組の工夫：

- (1) 市教育委員会の明確なビジョンと支援体制 『15』の春の実現（**充実支援**）
 - ・9年間の系統性のある指導で一人一人の学力を最大限伸ばし、進路実現を図ります。
- (2) 校長のリーダーシップと研究主任制の推進（**計画性と実行力**）
 - ・これまで培われてきた各校の伝統ある教育活動を、小中一貫教育の視点から見直し、新たな方向性を示します。
- (3) 9年間を見通して児童生徒を育てる意識を教職員全員が理解し、活動を推進（**チーム学校**）
 - ・相互理解の必要性を認識し、活動目的の明確化を図ります。
- (4) 小中一貫教育の良さを生かすために、これからの時代に向けた学習スタイルを確立
 - ・9年間を見通した質の高い授業実践により児童生徒の意欲を喚起します。（**先を見通す力**）
- (5) 「地域社会の中で進める小中一貫教育」と「学校を核とした地域創生」
 - （**地域に根差した教育推進**）
 - ・コミュニティ・スクール(学校運営協議会)を生かした小中一貫教育の推進を図ります。
 - ・地域の特色を生かし、地域に根差した教育を推進します。
 - ・必要な質と量で、適切な時期に児童生徒が必要とする支援を行います。

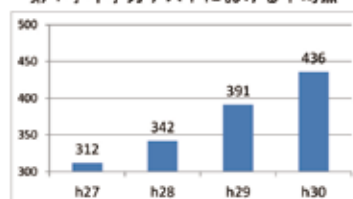
5. これまでの成果と課題、今後の取組

これまでの成果と課題を小中一貫教育の出口である中学校の4つのデータからまとめました。中学生の活力を生む素地が小学校で作られます。

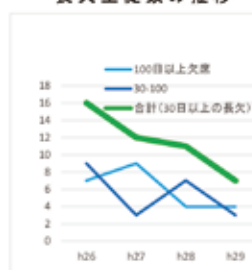
(1) 中1ギャップ解消

- ・平成26年からの中学校第1学年長欠生徒数（30日以上）は、4→1→1→1名と確実に減少しています。今年度の第1学年における長欠傾向生徒は、0名です。
- ・グラフは、平成27年以降の中学校第1学年で実施した学力テストにおける平均点の推移です。小学校で確実に基礎・基本が積み上げられてきたことや、中学校入学以降の学習がスムーズ、かつ、確実に実施できたことが要因と考えられます。（**小中学校のスムーズな接続**）

第1学年学力テストにおける平均点



長欠生徒数の推移



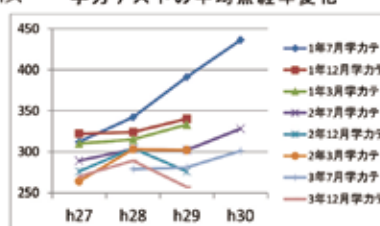
(2) 長欠生徒の減少

- ・グラフは、平成26年からの長欠生徒数の推移です。中1ギャップの解消だけでなく、中学校生活になじみ、充実した活動が実施できている証であると考えられます。（**9年間を通した帰属意識の醸成**）

(3) 学力の向上

- ・グラフは、中学校第1学年～3学年で実施した学力テスト（計8回）平均点の経年変化を表したものです。中学校入学時の高い学力が積極性を生み、授業が充実し、正の循環が生まれています。小学校第5・6学年で教科担任制を実施して教科指導に深まりが出たことが影響していると考えられます。（**学習意欲向上**）

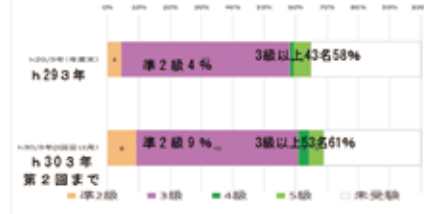
学力テストの平均点経年変化



(4) 英語力の向上

- ・英語力向上対策の充実や市の補助制度が効果を発揮し、英検合格者が大幅に増えています。中学校第3学年英検3級以上の合格者（3級相当者や英検I B Aを除く）が、昨年度は43名（58%）、今年度は53名（61%）、うち準2級が、昨年度は4名（4%）、今年度は8名（9%）です。
- ・中学校第1学年の実力テストで英語の平均点は96点です。85点以上の生徒の割合は93%（支援生徒を含む）と、中学校に入学して英語が得意な生徒がほとんどという成果を上げています。（**英語が得意という自信**）

英検合格者のh29・h30比較



◎ 今後は、学力・英語力の向上等に継続して取り組んでいくことが重要であると考えています。